

子供達と共に——弟へ——

小堀 恵美子

十日前、二五才でOは死んでいった。

病死であれ自殺であれ事故死であれ、もうとり返しよのない事柄が起ってしまったのだという事を認めるのはつらい事だ。

死をまぬがれる為に私達身近にいた者はどれだけのことをやったのだろう。

やり残した事がイッパイあるという悔いから逃れるのに相当な時間が必要だ。

大切に思っていた人を死から取りもどす事すらできなくて私はこれから何をする事ができるだろうか。九ヶ月の大きなお腹をかかえて新しい命の実感希薄になり、二十五才で断たれた彼の人生はもう二度とやりなおししようがないという哀しみとどこかしさがくり返しこみ上げて来る。

「そんなに簡単にあきらめたり忘れたりできるものか」囲りの励ましの言葉が腹立たしくさえる。

しかし、生き残った者は生への執着で日常を生きてしまう。

九ヶ月の生命の胎動を感じながら二人の子供の世話と保育所にやって来る子供達とのやりとり、やっぱり私は彼がもう居なく

なったという事実を忘れ果てている時が少しづつ多くなってくる。

まぎれもなく二十五年を生きた人間がそこに居た実感に比べてこれから生まれる九ヶ月のお腹の命はまだまだ希薄だ。でも多分、八月の誕生を境いにそれは逆転していくだろう。

そして子供達は育ち、二十五年目をどのように迎えるのだろう。その時、彼等にとって私は、母と呼ばれる役割りからどれだけはみ出た所で大事な存在になり得ているだろうか。

やり残した事がイッパイある。何もやらなかったという悔いに悩まされるのもうやりきれない。

共同保育と呼ぶ幻想集団を作って半年がたった。

まだ歩けなかったゴウもカンタも今では拾ってきたギンギシのソファからかけ声かけて飛び降りては尻もちついてケタケタ笑い声を立てている。

一番小さい紅一点のアサトが二十七日で一才になった。ピンクのクツとバラの花を皆んなでプレゼントして、母親のヨウコさんをねぎらった。

メグルは男性四人組の兄貴株、チビのカンタの挑戦を受けて絵本の取り合いで叫び声を上げているかと思うと、泣き出した仲間にお菓子をボンの少し口へ入れてやったりしてその容貌通り兄貴の貫録充分といった所。

私達と一緒にやる為に大阪から京都へ引越して来たタミオとヨウジの兄弟は、お母さんの姿が見えないと「よく続くなア」とあきれ果てる位泣き続けていたが、今では彼女のいない時の方が落ち着いて遊ぶようになった。目が大きくて身体付きがいかにも優しげなヨウジは、タミオを初め悪童共にかなりおびやかされて泣き入って唇が紫色になったりして私達を驚かしていたが、大きな目をいたずらっぽく輝やかせてさかんに仲間をたゝき廻って互角にケンカをするようになった。

一番大きいタミオは、あなたは大きいんだから小さい子をイジメてはいけないうい分規制を受けて欲求不満でヒステリーを起こしていたが、それは少しづつ解きはぐれて近所の子と表で遊んだりして良い兄貴ぶりだ。

今日から参加したアサトと同じ日に生まれた女の子のレミちゃんを加えて皆んなで七人、百万辺交差点のすぐ傍のパチンコ、マージャン、電車とバックミュージックの賑やかなこのオンボロの家で毎日毎日彼らは育っていく。

私達は何処にゐるんだらう。何処まで来ているんだらう？

「保育所」「保育者」といったイメージを取っ払って、自分の生んだ子だけでない子育てを数人の女達とそれぞれやってみたい、という欲求を手がかりにやれないものかと考え出してずい分

紆余曲折があった。

私の独断から出発した秘かな野心は、この世の労働のパターンと真向から対立してしまふ。サラリーマンとして働く事が労働と呼べるか。金は稼きたいけど食扶持を稼ぐ事が自立に向っているのか。

離婚した後、二才になったばかりの娘と二人、明日はもう稼げないかもしれないという思いにせき立てられた日々の中で、小さな冷蔵庫を買った時に味わった充実感を思い出す時、その五年間の自分がイジラシクもあり、それ程欲望が狭められていたのかと恐ろしくもある。

「私の気持ちなんか他人にわかるものか」とキリキリ神経が突がっていく時、その感覚の鋭さに比例して人恋しくジメジメしたモロイ私がかくく行くと行く。過不足なく物を見る目が失くなって囲りとのコミュニケーションがうまくいかなくなってしまふ。布団に入って一日を終える気になれないまゝコタツにゴロ寝している私のすぐ傍で、小さな布団で安心して眠っている娘の生活のリズムが私を日常に呼びもどしてくれた事が何度あったらう。私は彼女に助けられて生きのびて来た。

子供の為に生きのびてきたのではなく、子供に助けられて今の私がいる。人は一人では生きていけないのだ。

その後、彼と一緒にカンタを産み、夏には三人目の子ができきる。

弧立して生きるシンドさや、限界を知った時思い切り自分を開いてユックリと生きてみたいという気持が大きくなってきた。

人は囲りとのつながりの中で生かされている。それが自然なの

だ。それを認めた時、実に楽々と囲りを感じ取れるようになって来た。それならばいっそ積極的に家族——家庭の枠組みをはずして、自分の暮らしの場で他の家族と共に日常が送れるようにしてみようというのが、ボロ家を改造しての共同保育所作りになっていった。

この家には夜も客の来ない日が珍らしい位人の出入りがあり、その一人一人がこの家の改造から、子供の世話から、家事に至るまで何かの手助けをしてくれていてこの場を作っている。その人達との関係の中で、私達家族の暮らしのリズムが作られて行く。

ここからここまでが私的な領域で、ここからが公の場などと言っていたのではこの場は作れないし、まして共同で子育てなんかはできない。

そして時々子供や彼が寝静まった後、スタンドにフロシキをかぶせた小さい光の中で私は一人になる。

七人の子供の親達（主に母親）が交代で共同保育をやる毎日、それぞれの家庭の実体があからさまに見えてしまう。それは恐ろしい位子供にはね返っているの、私達は昼間の区切られた時間の付き合っただけですまなくなってしまう。

互いにあばき合いの違いを強調し合うのではなく、違いがあるのが当然なのだから、私達が生き続けている限り「子育て」も「他人とのつながり」も終りようがないんだから、自分が死ぬまでの長い射程でユックリとつながりをふくらませていこう、という程のつもりだ。

私達の行為は保育というか子育てというかその範囲に止まっていられない。

不幸にも——残念ながら不幸にも、一人で子供を生み育てることになった女友達の出産前後の一つ一つの世話に私達はかわりをもってしまう。それは他人事ではなく、生んだ女は身につきまされて放っておけないのだ。

彼女は相手の男や家族の手を借りないで、数人の男女の手助けで無事に女の子を産み、明日退院する。退院後もしばらくは皆んなが交代で彼女と子供の世話にアパートへ通うことになる。

私の夏の出産の時もそんな風に多くの人達の世話になるだろう。そして他の六人の子供の家族達にも何かが起った時、この場のつながりの中で私達がどれだけの力量をもっているかによって、弧立を強いられる世間の暮らしのパターンの中で私達は私達なりに生き延びられるか、それはかなりに厳しいところだ。

この世に福祉という言葉があるそうだが、実体はまるでない。私達の日常を実感できない役人や政治家に何ができよう。しかし、私達のやり方はそれ程拡がりをもてないだろう。そのの所をどうするかせかれる気持をなだめつつ、意識的にユックリとさぐって行きたい。

定期購読者 募集中ノ

月刊『リベール』

B 五版十二頁

購読料 年間六〇〇円

京都市左京区田中門前町二八の五 リベール社